
WING

桜田 零

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WING

【Nコード】

N8117X

【作者名】

桜田 零

【あらすじ】

騎士学校に通っていた主人公カナト？デイルア。

卒業試験を終えて魔法騎士になるために異国へ旅立つが、千五百年前に解散したはずの組織が動き出し、戦いに誘われる。

二つの世界で織りなすファンタジー小説ここに開幕！！

「ご都合主義だったりしますので、あまり好きでは無い方はご遠慮なさることをお勧めします。」

この作品はサイト『SYMPHONIA』の方で

も掲載させていただいています。

プロローグ（前書き）

初めまして!!

初めての作品なのでお見苦しい所がありますがよろしくお願いします。

プロローグ

深い、深い森の中、僕は必死に走り続けた。

こけそうになりながらも、ボロボロになりながらも、走って、走って、走って…僕はついに転んで、もうだめだと思ったその時、どこからか叫び声が聞こえた。これはまだ僕が幼かったころの遠い、遠い、昔の記憶…。

あれから13年がたった。

「ほらかナト、行くよ!!」

「うん!!」

あの人のようになりたくて、僕の誇りだった父の背中を見て、僕は、今、ここにいます。

大切な人を守る程、強くなりたくて、僕は、歩き出す。

卒業試験

閃光が走る。

モンスターによけるステップに合わせ、前へ、前へ、切り裂く。

モンスターは後ろへよけた反動を使い僕に一気に飛びかかって来る。

僕は後ろへ下がりながら剣を下から振り上げる。

銀色の閃光は弧を描きながらモンスターを捉えた。

相手は、例えウルフと言えども、最近急増している”原因不明の凶暴化”によつて強くなっている。

悔るわけには行かない。

「カナト、後ろー!!」

パートナーのメイシエンが叫ぶ。

僕はとつさに体をひねり、左足に重心をかけてウルフを切り裂く。

そのまま背後を狙つて来たウルフも遠心力を使い、右足で回転蹴りをした。

打撃を与えたその直後、後ろにいたメイシエンの殺気を感じた。

僕はとつさに上へ跳躍し、メイシエンがランスでウルフを突いた。

メイシエンがそのまま上へ投げ飛ばし、

そいつを僕が、

切り落とす!!!

『雷空斬!!!』

僕が着地するころには、勝負はついていた。

「はあ、終わった終わった。お疲れ様、メイシェン。」

”私生活の僕”に戻る。

いつものほほんとしてると言われる顔でメイシェンに話しかける。
おだんごに三つ編みとこの辺では、珍しいが、黒い髪がその不思議さを打ち消していた。

「カナト、お疲れ様、じゃないでしょ！！まだ終わってないのよ。
今回は、卒業試験でノルマクリアして、早く帰らないと卒業できないんだからね！！」

すっかり忘れてた。

僕の住むリデリア王国は、王政で、国王と国を守るのが騎士の仕事。
その騎士になるために通うのが騎士学校。

僕もその学生の一人で六期生。ただ今、卒業試験の真最中です。

「そうだったね。さあ、帰ろうか。」

そう言っ学校に帰ろうとした時、どこからか子どもの泣き声が聞こえてきた。

僕はその方向へ走りだした。

「ノルマはクリアしたけど、のんびりしてちゃダメよ。善は急げって言うし……って、カナト、どこ行ってるの！？」

メイシェンの言葉も聞かずに僕は声のする方へ走って行く。

その先で見たものに目を丸くした。
沢山のウルフに襲われている少年が必死に逃げ道を探していた。

それが十三年前の僕と重なって見えた。
啞然としていた時にメイシェンが追いついた。

「カナト、ちよつとまちなさいよつて、大変。あの子、ウルフに襲われてるじゃない。なにぼつとしているの？」

メイシェンに叱られてやつと我にかえった僕は、あの少年を助け出す方法をかんがえた。

ウルフはざつと、二十を超える。普通に戦ったら、試験に間に合わない。それに増援を呼ばれたら僕らだけじゃ、手におえない。

やっぱり、アレを使うしかないか。

「メイシェン、時間稼げない？」

「できるけれど…何で？」

まだ一回も使ったことのない、リデリア式魔法を使おうと決めた。

「リデリア式魔法を使う。詠唱が長いから、それまでウルフ達のきをひいていてほしいんだ。」

【ミッシェンの時の僕】が作戦を練る。

魔法を使うと聞いたメイシェンは、驚愕した。

「魔法を使うつて、そんなことできるの？いくら才能があるからつて、いきなりは無理よ！！」

彼女の質問に答えた。

「大丈夫だよ。確信はある。それに、あの子一人置いて、騎士団ま

でに、報告に行くのか？」

この時、彼女から見てぼくは、冷たいらしい。
そんなに怖いのかな、僕？

メイシエンは、少し黙ってから、

「…わかった。その代わり失敗しないでよ!!」

そう言つて、少年のいる所へ飛び出していった。
僕は、すぐ詠唱をはじめた。

『風よ、我が呼びかけに答えよ。』

魔方陣が浮かび上がり、緑色を帯びた白い光が、足元からあふれて
覆い尽くした。

『鋼の剣、銀の風、鉄壁の盾を持つ者よ』

体が重い。これが【魔力を消費する】っていうことなのかな？
そんなことを考えながらさらに詠唱を続ける。

『我が力と共に汝を放たん。』

メイシェンの方はうまくやっているようだ。
あと、少し。あと少しだ。

『かの者を切り裂き、吹き飛ばせ！！』

風が僕を仰ぐ。

よし、かたちは、完成した。後は術を放つだけ。

「メイシェン！！」

僕が彼女の名を叫ぶと彼女は、少年を連れてその場から離れた。
剣を引き抜き、ウルフの群れに向けて、叫んだ。

―十三年前、あの人がやってくれた様に。

『具現せよ、ブラスト・ストーム！！』

目の前が一瞬真っ白になった。

ウルフ達がいる所の中心から風が起こり始めた。次第に渦巻き、大きくなり、拳句の果てには、空へと続く大きさになった。

「こんな馬鹿でかいの初めてみたわ。」

向うの方で、メイシェンが、叫んでいた。

これが、僕の魔法騎士になる第一歩だった。

初めての感覚、初めての自分の実力、そして、なにより魔力の膨大さに圧倒された。自分で繰り出しておきながら。

―その風がやむころには、僕に立ちふさがるウルフは一匹もいなかった。

学生と少年

「うまくいったのね。」

少年をつれてメイシェンが嬉しそうに歩み寄ってきた。

メイシェンのいつものやわらかな笑み。それを見ると、「ああ、終わったんだな。」そう思える。

しかし、その後、彼女の表情は変わった。

「汗だくじゃないのっ！！大丈夫なの？」

そう指摘されて、僕もやっと、初めて気づいた。体中、汗がボタボタ垂れていて、髪も服も、雨が急に降ったのでは、ないかというようなくらいぬれていた。

「大丈夫だよ。このくらい。」

心配をかけないように、微笑む。

「この辺はまだ危ないし早く帰ろうか。」

そうメイシェンに言っていると、僕はしゃがんで、少年の目線に合わせる。正直言うと、しゃがむのすら辛いほど、体力を消費しきっていた。でも、あえて表情には出さない。メイシェンが、気をつかうといけないからだ。

「君、名前は？家どこかわかる？」

僕が少年に笑って話し掛けると、少年は恥ずかしそうにこちらを見

た。

7、8歳の少年の夜色の瞳が、こちらを見つめている。その瞳がとろけたあと、少年はやっと、話してくれた。

「フィル。家はグランツにあるんだ。」

グランツとは、王都のことで僕たちの騎士学校もそこにある。

「それじゃあ、ちょうどいいわね。フィル君、お姉ちゃん達が家の近くまで送っていつてあげる。」

メイシェンがフィルに言うと、素直にうなずいた。

三人並んでリデリアを目指した。

帰り道の途中で、僕はふと思った。

何故、こんな危ない森に7、8歳の少年が一人で、いるのか。そして、何の目的でこんな所にいたのか。

不思議でたまらなかった僕は、ついに、フィルに聞いてみた。

「フィルは、どうしてあそこにいたの？」

夜色の瞳が驚いたように、こちらを見た。瞳の奥にある輝きが少し濁った気がした。

「ブルーベリー。」

彼が最初に口にしたのは、ぼくの好きな果物だった。

「あそこには、ブルーベリーが沢山なっている所があるんだ。母さんが病気なんだ。だから母さんの好きなブルーベリー取ってきてあ

げようと思つて。」

母親思いの少年は、ぶっちゃけてスッキリしたというような、顔おしたが、すぐに不安そうな顔をした。

「母さん、大丈夫かな？」

しゅんとしたフィルの赤茶色の頭をなでてやった。

「大丈夫。きつと、良くなるよ。」

「本当か?!」

嬉しそうな顔をして、見上げてきた。

笑つてうなずいてやると、嬉しそくに飛び跳ねて、走りだしてしまつた。

僕もフィルを追いかけて走り出した。

「ねえ、待つてよー!!」

置いてけぼりにされそうになったメイシェンが、急いで追いかけてきた。

疲れているはずなのに、走っている時の体は軽かった。

どのくらい走つたのだらう。気づいた時には、リデリアの外門まで来ていた。

「もう、二人とも速いよー。」

息をきらしながらメイシェンが走つて来た。

「遅い!!」

僕が少し怒った後、そのまま笑い飛ばした。

フィルが門が閉まっているのを見て、少し心配そうに尋ねてきた。

「門、閉ってるけれど大丈夫なのか？」

笑って答える。

「見ていてごらん。」

僕がそう言うともフィルは安心したようにうなずいた。

隣のメイシエンとアイコンタクトをとった。頷き合い門へと目を戻す。巨人が入れるくらい大きな扉に向かって僕は叫んだ。

「リデリア騎士養成学校六期生カナト・デイルア。卒業任務より只今帰りました。」

メイシエンが続ける。

「同じく、リデリア騎士養成学校六期生、李^リ美申^{メイシエン}。卒業任務より只今帰りました。」

見張り台にいた当番の騎士が紙を見て、僕達に叫んだ。

「六期生カナト・デイルアと、同じく六期生李^リ美申^{メイシエン}を確認した。」

騎士がフィルを見るとフィルは証明カード（証明書の簡易版）を掲げた。

「リデリア国民も確認した。これより門を開く。」

門の扉はギギツと音たて、ゆっくり開いた。
僕等の帰還に安堵している様だった。

「よし、行こうか。」

僕たちは、ゆっくり歩き出した。

グランツ内は緑豊かで、沢山の植物が街にはあった。

街中にある木々、色とりどりの鮮やかな花々。そして、なんと言つても、リデリア城の方へと吹く風が、すごく気持ち良かった。

三年前に、初めて近くで見たリデリア城の神木が、今日も街から見えている。

神木を眺めていると、城に近い方向から声がした。

「フィリウス殿下、ここに居られましたか。」

振り向くと、城の騎士がこっちに向かって走ってきている。

王子フィリウスがここにいるわけないだろうと思いつながら、僕はフィルを見る。だが、フィルは、少し焦っている顔をしていた。

「フィル君、もしかして…」

メイシェンも気づいたのか、おそろおそろフィルに聞いた。
だが、フィルはずっと黙っていた。

「フィル、そうなの？」

僕が聞くと、フィルはうつむいたまま黙って頷いた。
悲しそうな彼を見て、もう少しだけ外の世界を見せてあげたいとい
う衝動に駆られていた。

行動は早かった。

フィルの腕をつかむと、お気に入りの場所に向かって走り出した。

「おい、どこ行くんだよ!!」

「とっておきの場所。」

僕がそう言つと、彼は少し微笑んだような気がした。

僕とアイツと王子様

王都の裏門を出て、近くの裏山を登って行った。

登りきったそこには、澄み切った青空と色とりどりの花が沢山ある花畑へと出た。

ここは、入学した当時からのお気に入りの場所だった。フィルも目を丸くして僕の隣に立っていた。

「なあ、あそこに誰がいるぞ。」

フィルの指差した方向へ目をやると、そこには僕と同年の赤毛の青年が立っていた。

見覚えのある背中がこちらに振り返る。

「っ……!!!」

「よお、カナト。やっぱりお前も来たのか？」

「エルザっ……!!」

僕と同じ騎士学校の六期生であるエルザがそこに立っていた。

エルザは、僕のライバルで、この場所を教えてくれた、良き親友でもあった。

僕の隣の少年を見て首をかしげる。

「おい、なんでリディアの王子がカナトと一緒にいるんだ？」

僕は、驚いた。

「えっ！？なんで知ってるの？僕もメイシェンも言われるまで分らなかったのに。」

エルザはため息をついた。

「俺は、レンツで一回会ってるんだ。忘れるワケねーだろ。」

僕は、それで納得した。だが、何故レンツにフィルが訪れたのか不思議だった。

「何でフィルがレンツにいたの？」

僕の隣に立っている王子様の方を見て、真剣な眼差しを向けた。

「二年前のレンツは村自体が貧しくって、父上と僕はその時の様子を見るために足を運んだんだ。」

「その時、ちょうど帰ってた俺がフィリウス殿下と会ったんだ。」

フィルの説明にエルザが付け足した。

そうだったのか。

確か二年前、大凶作だったレンツに生活のための保険金が配られたっていう話を聞いたことがある。

…そして、それが騎士団の幹部級だった父さんの最後のミッションだったことも。

「そういえば、カナトの親父さんの最後の仕事だったんだっけ？」

「カナトのお父上は、騎士団の団員だったのか？」

少し悲しそうにいうエルザの言葉にフィルが目を丸くした。

「うん、そうだよ。」

笑って僕は頷いた。

きっと、悲しそうな顔をしていると思うけど…。

そして、話を続ける。

「騎士団の幹部級だったんだ。強くて、優しくて、かつこよくて、僕の憧れの人たちの一人だった。」

フィルがはっとした。

フィルは、王家の王子だから知っているのかもしれない。
僕の予想どおり、彼は聞いてきた。

「カナトのお父上の名前はなんていうんだ？もしかしたら知っているかもしれない。」

フィルの質問に誇りを持って答える。

その声は、本人でも驚くほど凜としていた。

「クロト。クロト・デイルア。」

フィルは、夜色の綺麗な瞳を大きく見開いた。

「クロトさんの息子だったのか。どつりで—」

「ん？どつりで……何ですか？」

途中で言うのをやめたフィルにエルザが質問する。

フィルは、にこりと笑った。
すぐくツンとしていたフィルもこんな表情をするのだなと意外に思った。

「どうりで、強くて、人騒がせで、お人よしだなんて思ったんだ。カナトって、まんまクロトさんなんだな。」

そう言うのと、フィルは声をあげて笑った。
それを聞いたエルザも、腹を抱えて笑い出した。

…改めて、僕が父親に似てきたことを実感したような気がする。

「そ、そうだ！確か、王妃様がお体が悪くて城の中にずっといらつしゃるんでしょ？この花もいくつか摘んでいってあげたら良いんじゃないかな？」

少々ごまかし気味に話を逸らした。

「そうだな。母上に持って帰ってあげよう。」

そう言うのと、色とりどりの花を摘み始めた。
しばらくしてフィルが、抱えきれない程の花々を持ってきた。

「それじゃあ、カナト、殿下、帰ろうか。俺たちはまだ試験中だし、街の兵士たちが血眼になって探していると思うからよ。」

「ああ、そうだな。」

「うん。」

笑い合った僕たちは、グランツの街に帰ろうとしたその時だった。
いきなり激しい目眩にみまわれ、そのまま視界が真っ暗になると同

時に、意識が飛んでしまった。

次に気がついた時は、学校寮の自室だった。

「ん…、あれ？ここは……」

「カナト、起きたのねー！」

最初に気づいたメイシエンが僕の方へ駆け寄ってくる。

「やっとお目覚めかよ。」

「よかった。カナト、やっと起きた。」

メイシエンに続くように、エルザと彼のパートナーであるリノがこちらへ駆け寄ってきた。

三人とも、すごく安心したような顔をしている。そのぐらい長く寝ていたのか、それともそのぐらい僕が起きる見込みが無かったのか、どちらにしろ、メイシエンたちはかなり迷惑をかけていたみたいだ。

「僕、どのくらいの間寝ていたの？」

「丸一日は寝ていたと思う。メイシエンから聞いたけど、カナト、魔法つかったんだって？ 私たちも見ただけど、すごい威力だったね。」

リノの言葉に僕は目を見開いた。

今回の試験は、それぞれエリアごとに分かれて、モンスター討伐をしていた。僕たちは南エリアの一角でエルザたちは北エリアの外れだった。

かなりの距離があるのに見えたということは、それほど大きなもの

を僕は繰り出したことになる。僕は、自分の想像を凌駕する能力をもっていたのだ。

学生の中には僕みたいに魔法を扱う者もいるけれど、やはり威力はそんなに大きくないし、ましてや、卒業試験で使う人なんていないと思う。

今回のことで、教官たちはどんな反応をするか不安になっていたときだった。

ドアをノックする音がした。

「開いています。」

そう返事をする、ドアの向こうから現れたのは、僕のクラスを受け持っているレイド教官と僕らに魔法の基礎を教えていて、現リデリア騎士団団長のユエ教官だった。

僕は慌ててベッドから出ようとしたが、レイド教官に止められた。

「今はまだ横になっておけ、カナト。調子はどうだ？」

「順調です。ご心配をおかけして申し訳ございませんでした」

レイド教官の方を向き、謝った。

顔を上げて教官の方を見ると、少し眉を上げているような気がした。

「もしかして、教官、怒ってます…？」

なんて、「冗談でも言えないような表情をしている感じがするのは間違いないと思う。僕はそんな表情をされてもいいことをしたのだから。

合否判定にも影響してくるに違いないということは承知している。魔法を使っただけでなく、フィルを…フィリウス王子を帰さずそのままつれて行ってしまったのもある。

合否判定以前に退学させられてしまふのではないのか。

それだけは怖くて、握り締めた右手が微かに震えている。

レイド教官は何かを思い出したような顔をした。

「カナト、お前に客が来ている」

「え、お客様、ですか？」

「そうだ」

レイド教官はそういうと、ドアの方へ目をやった。

それにつられて僕達もそっちを見やった。

「失礼します」

僕は目を疑った。

「ご気分はどうですか、カナト殿。お目覚めになったと聞いたのでこちらへ参ったのですが…」

そう言つて僕の部屋に入つて来たのは、昨日助けた少年だった。だったのだが、明らかに別人のようだった。気品のある格好や僕に敬語を使っているところを見ると、ここに居るのはフィルではなく、王子フィリウスなのだと思つてしまう。

「友達ではなく、王子と国民という立場というこの距離がとても悲しかった。」

「ご心配をおかけして申し訳ございませんでした。そして、昨日のご無礼、反省致します」

そう言つて頭を下げる。（ベッドにいる状態から言つのもかなり失礼だと我ながら思つけど…）

「顔を上げて下さい」

そう言われ、顔を上げると微笑んでいる王子殿下の顔がそこにあった。

「カナト殿がお元気なら、それで良いのです。それに、昨日のことは怒つてなどおりませんよ。むしろ、貴方のお陰で母上に良い贈り物をする事ができましたから」

殿下の無邪気な笑顔を見ると、本当にそう思っているんだなつておもつた。

殿下は、レイド教官とユエ教官の方を向くと彼らに告げた。

「レイド殿、ユエ殿、少しの間席を外して頂きたいのですが」

殿下のお言葉に教官達は驚いたようだった。

「しかし、」

「ここは席を外しましょう、レイドさん。これは、殿下のお望みなのですから」

そついうと、ユエ教官はレイド教官をひっぱて僕の部屋を後にした。二人が出るのを見届けると殿下は僕らの方を見やり、思いつきりため息をついた。

「はー。ダルっ」

その一言が何故だかとても嬉しかった。

「これでやっと普通に話せる」

そこにいたのは、さっきまでいた王子ではなく、昨日助けた少年、
フィルだったのだ。

嬉しすぎて思わずベッドを飛び出した。

「フィル!!」

ぶっちゃけます!!

いきなり飛び出してきた僕にフィルは驚いた。

「馬鹿、いきなりベッドから出るな!! 病み上がりなのにそんなことしたら、ころ…」

ガシャン!!

エルザの座っていた椅子の脚に言われているそばから思いっきり扱けた。

「ほら見る、言わんこっちゃない」

「相変わらずのドジだな」

「任務中と大違い」

「…カナト、大丈夫?」

それぞれ思い思いの事を一斉に口にするので、何を言っているのか分からなかった。

リノは心配そうにこつちを見ていて、フィルは頭を抱え、首を横に振っていた。

その二人の様子からして心配してくれているのだと思うのだが、後の二人は顔がにやけていた。

…ねえ、そこのお二人、僕のことからかってません?というよりからかってますね? あっ、目をそらした!!

「メイシェン！エルザ！二人して僕のことからかつてるでしょ！？」

二人は知らないふりをしてそれでもまだからかってくる。

「あら、何のことかしら？パートナーの私がそんなことするわけないでしょ？もう、カナトったらひどーい！！」

「ひどいのはメイシェンの方じゃん！！」

二年後に僕の友達であるクロガネに話したとき、

「お前らなんつーじゃれ合いしてたよ。十八とは思えないくらいじゃねーか」

と言って笑われてしまった。

僕自身も結構恥ずかしかったりしたっけ？

そのままみんなで笑いあった後にエルザがぼつりと言葉を漏らした。

「こうしていられんのも今のうち、なんだよな……」

あんなにうるさかった部屋が一気に静寂に包まれた。

そのまま沈黙が続き、やっとメイシェンが恐る恐る口を開いた。

「……どういう…こと？」

エルザが微笑んで答えた。悲しみを帯びた微笑で。

「いや、カナトは初めて聞くと思うけれど、俺たち全員合格しただ

る？その後はみんな散り散りになるんだなって思ってた……」
「え？」

僕たち全員合格だったことには驚いたけれど、それとは他にエルザの言っている意味が全く分からなかった。
少し困った顔をして頭をかいた。

「俺、卒業したらジェノスに行こうと思う」

「……ええええええっ！？」「……」

いきなりの告白に驚きを隠せない僕を含む四人。

……なんだか最近では驚かされてばかりだった。

「でも、どうしていきなり？」

僕がエルザに聞く。

エルザは、真剣な眼差しで心境を語った。

「俺の夢ってさ、どんな状況でも対応して戦えるようになってみんなを守りたいんだ。そのために銃器の扱い方を専門的に勉強したいと思った。だから、ジェノスに行こうって、決めた。そりゃあ、ネルに行く方が、機械技術も発達してるから一番だと俺も思うけれど、ネルは別の世界だろ？俺達には行くことすらかなわない。だから、このリオで一番機械技術が発達してるジェノスで強くなろうって思ったんだ。」

エルザもエルザなりに考えてるんだなって感じた。今此処にいる僕達と同じように守りたいって気持ちも。

だから僕はエルザの行く道を応援したい。また背中を合わせて戦う日まで。

「でもそれじゃあ、騎士と言うよりは傭兵じゃん！」
「うっせー！！」

メイシエンにツッコまれて顔を赤くするエルザ。その様子があまりにも可笑しすぎて笑ってしまう僕達。

「そういえば、女子二人はどうなんだ？」

フィルが女性陣二人に聞いてみる。
先に答えたのはメイシエンの方だった。

「私は、実家の仕事を手伝うつもり。何時かは私が継ぐ仕事だし…。」

メイシエンの家の仕事のことを初めて聞いた。パートナーの僕にも話してくれなかったことだ。きっと、重要な仕事なんだと思う。

「メイシエンの仕事って何ですか？」

リノの質問に笑って答える。

「調律者よ。千五百年前のあの戦いがまた起こらないようにね」
いつも頼りがいのあるパートナーが何故だか初めて逞しく見えた。

調律者とは、千五百年前にあった『翼大戦』の後、敵組織がまた出

てこないように見張りをする人のことで、代々、李一族が仕事を受け継ぐことになっているらしい。

あれ？ちょっと待って、メイシエンの本名って確か…。

「あああああー！」

本日三度目のびっくりです。

そうです、そうですよ。メイシエンの本名は李^リ美申^{メイシエン}。れっきとした李家のお嬢様です。

……僕、そんな人と組んでたんだね…。

今頃気づく僕も僕だと思いますが、言ってくれなかったメイシエンもメイシエンだと思います、全く…。

「でももちろん、なれてきたら騎士の仕事もするつもり。私、本当は騎士に成りたかったんだもの。意地でも成らなくちゃ！」

そっか、だから言わなかったんだね、自分が調律者だということを。自分のやりたかったことを全力でやりたかったただだったんだね。さっきまで溜まっていた彼女への不満がスッと消えていった。

メイシエンはそのままリノに話を振った。

「で、リノはどうなの？この後」

「私、ですか？えっと、私は…」

いきなり自分に回ってきてしまったリノは、少し戸惑っていたが、すぐに切り替えて話し始めた。

「私はこのまま、騎士団に入りたいと思ってるの。見習いとしてなら自分の隊に入れてもいいと、お姉様もおっしゃってしまいましたね。」

ああ、そっか。リノは確か伯爵家のご令嬢だもんね。貴族特有の金髪（僕も金髪だけど、感じがちよつと違う）に緑色の瞳だから一目で分かる。初めて会ったときすぐに分かった。

「リノのお姉さんの隊って、確か上位一、二を争ってる実力派の隊だったよね。騎士見習いと言えどもすごいじゃない！きつと力がつくと思うよ。」

少し興奮気味になってリノの手をとったメイシェンだが、メイシェンの行動に少し驚いてとうの本人はそのまま固まってしまった。

「メイシェン、あんまりリノをいじめるなよ」

「ちよつとエルザ、私いじめてなんか…あ、」

エルザにからかわれて、やっと気づいた。メイシェンはそのままリノの手を放す。

「いやああああっ！！リノ、ごめん」

「大丈夫だよ」

リノは優しいから、メイシェンの行動も笑って許してやる。そんな光景も見られなくなるのかな、本当に……。

「カナト、何笑ってたんだよ」

「え？」

エルザに言われて、自分の頬が上がっていることにやっと気づいた。

さっきのメイシェン達のやりとりが可笑しかったのかな？

「何でもないよ。そういえばフィルは将来どうしたいの？」

「あ、私も殿下の将来の計画、聞きたいです！」

「俺もです」

「私も…です」

みんなで一斉にフィルの方を見る。

フィルは少し驚いていたが、すぐ微笑んで話し始めた。

「あ、俺のことは今後はフィルって呼んでくれ。それと…敬語は無しだ。俺だけ仲間外れみたいでやだよお」

ってちよつと子どもっぽい前置きを置いて。

「俺はもちろん、今後は政治に関わってくると思うけど、せめて、騎士学校には入りたいんだ。ただ玉座でふんぞり返っているだけなのはイヤなんだ。俺だって力になりたい。大好きなこの世界を守りたい。ただ、それだけなんだけどな…」

最後の方は少し照れくさそうだった。

僕も昔はそうだったっけ？

「フィル、すごいです。私も応援しますね」

そう言ってリノが赤茶色の頭を撫でてあげると子猫みたいな顔をして、困っていた。

「さて、最後はカナトの番だよ」

とうとう回ってきてしまった。

話したくなかった。みんなと別れなくてはならない時間がすぐそこに来てしまいそうだったから。

手元に視線を落とす。知らず知らずのうちに、奥歯を噛み締めていた。

「僕は……………」

ぶっちゃけます!! (後書き)

んー、やっぱり読みづらいかな？

その辺などを兼ねてご感想を頂けると幸いです。

WINGを読んで下さってありがとうございます)

(

知らないのは僕だけだった（前書き）

今回はみじかいです。

ごめんなさい（T^T）

知らないのは僕だけだった

「僕はユグドラシルへ行く！！」

僕は自分の意志を示したけれど、怖かった。

みんなの悲しそうな顔を見るのが。行かないでと引き止められるのが。

でも、みんなは笑っていた。

「やっぱりそういうと思った。だって、カナトってらユエ教官に憧れてるの、バレバレなんだもん。そうなったら、カナトがユグドラシル行っちゃうのはみんな予測済みなんだから」

「ええ！？知ってたの！？それじゃあ、僕のあの不安は何だったわけ？」

なんだ、みんな分かってたんだ。それだけで気が楽になった。だが、それと同時に考えてる事がわかりやすい自分のため息が出てしまう。

「そういえば、クロトもよく話してたな。『息子はいつも、魔法騎士になるって言うてましたよ』って。そしたら、本当にユグドラシルに行くって言い出すなんて…」

ええ！？フィルまで知ってたの！？その前に、父さん、フィルに話してたの！？

驚いてばかりだったから、本当に腰が抜けてしまいそう…。

みんなが笑っている中、一人うなだれていたところだった。

「殿下、お話は終わりましたか？」

そう言って入って来たのはレイド教官とユエ教官だった。

「あ…じゃなかった、はい。お待たせして、申し訳ございませんでした」

フィルはそういうと、帰り支度をしだした。

「カナト、結果はエルザ達から聞いていると思うが…」
「ちよっと待って下さい！！」

少し焦った。しかも、ボケ担当の僕がツツコんだ。
この部屋にいなかったはずの教官二人が何故僕の合否結果をエルザ達から教えてもらっていることを知っているのか分からなかったからだ。

「何故、教官方が僕がエルザ達から教えてもらっている事をご存知なのですか？」

「ふふっ、そんなだと魔法騎士に成れないわよ、カナト。周りをよく見て見なさい」

ユエ教官に言われて、辺りをよく観察してみる。
すると、部屋の隅にガラス玉くらいの大きさの水球が浮かんでいた。近づいて観察したしてみると、中で光が点滅しているのが見えた。これでやっと気づいた。

「教官方、これって盗撮ですよね？」
「あらヤダ、盗撮なんて人聞きが悪いじゃない。そこは監視って言っ
て欲しいんだけど…」

すぐさま、僕とフィルは反論した。

「フィリウス殿下が護衛を外されたのに、これじゃあ監視も盗撮も一緒じゃないですか！」

「カナト殿の言うとおりです。私にはプライバシーが無いのですか？」

みんなしてきょとんとしてしまった。

此処にいる全員が同じことを思っているに違いない。

「殿下、プライバシーなんて言葉、どこで覚えられたのですか？」

フィルが言うには、父さんが教えたらしい。

何やってるんだよ、あのクソ親父！なんていう文句を今此処にいない人に言ってみる。

当然、返事なんて返ってくるわけがない。それが少し寂しかった。

「カナト・デイルア」

「はいっ！！」

いきなりレイド教官に名前を呼ばれ、反射的に返事をした。

騎士学校では

「返事第一！」

なんて校則があるから、自然と身についてしまう。

外部入隊で無い限り、全ての騎士が通る関門だから、殆どの騎士がすぐ反応する。

もちろん、父さんとレイド教官は此処を通ったし、外部入隊のユエ教官もこの学校を卒業している。

レイド教官は僕に教科書と同じサイズ（後になってクロガネから聞いたけど、ネルではこのサイズのことをB5って言ってるらしい）

の封筒を渡してきた。

「エルザ達から聞いていると思うが、規則的にやらなければならないからな。合否結果だ。受け取れ」

そう言つてレイド教官は僕に茶色の封筒を渡してきた。

受け取つて中身を見る。実は、エルザ達が言つたことはフェイクで本当は落ちてるのではないかと心配になっていた。

封筒の紐を解いていく。回していく度に鼓動が高まる、緊張する。やっと紐を解いて、封筒を開ける。そろそろ中に入っている厚紙を出す。

そこには、『不』の字は無かった。

これって、え、やつぱり！？僕、やったの！？

すごく、嬉しかった。わかつていたはずなのに、飛び跳ねては、いられない。やっと、やっと夢への第一歩を踏み出したんだ！

「カナト・ディルア、汝にリデリア騎士養成学校卒業資格を与える。おめでとう、カナト」

ユエ教官に言われて、凄く嬉しかった。

目尻が熱くなるのが分かる。照れ臭いのかな？

「ありがとうございます！」

「よし、それじゃあ、此処にいる合格者のお祝い会しようぜ！殿下、申し訳ございませんがもう少しお付き合いねが…」

エルザの方に怖い圧力がかかる。その圧力の発信源を見ると、フィ

ルが年齢に見合わないプレッシャーを放っていた。
流石のエルザも慌てて訂正した。

「あー、えっと…フィル、悪いけどもうちょい俺らに付き合ってくんね?」

タメ口で話すと、さっきのプレッシャーはどこへやらに消えて、満面の笑みに変わっていた。

「当たり前だ。友達のお祝い会なんだからな」

メイシェンが調子に乗り始めた。

「それじゃあ、さっさと準備終わらせましょっ!!リノ、手伝って

!」

「はい!!」

「私もいいかしら?」

メイシェンと一緒にリノとユエ教官が調理場へ行ってしまった。

「せっかくだから、教官も一緒にどうですか?」

「いや、遠慮しておこう」

僕の誘いを断り、教官は僕の部屋を後にした。

さて、騒ぐぞあ!!なんて変な気合いが入っていた。

卒業前夜（エルザ side）（前書き）

視点をエルザ君にしてみました。

此処でやっとカナト君の容姿について紹介できる…（T^T）

卒業前夜（エルザ side）

試験が終わり、一週間が経とうとしていた。あの日の夜は少し食べ過ぎてしまったと思う。なんせ、メイシエンとリノが張り切っていたし、ユエ教官も手が込んでたからな。

俺は、自分の部屋に置いてあった木刀に手をかけた。今までの六年間で捨てる事無く使ったから、全体的にだが、特に刃にあたる部分がすり減っていた。入学祝いにクロト・デイルア隊長にもらった物だったから、大切に使っていた。

もう、これで打ち合うことは無いと思うけど、形をする時はまた使うと思う。

何故って、明日は卒業式だからな。

俺もアイツもメイシエンもリノも…みんな別々の道を歩く。そう、別々の道を…。

そう考えると、寂しさが心の奥から湧き上がる。今頃になって実感し始めた。

―別れたくない。ずっと一緒にいたい―

俺の中で一つの感情が渦巻く。

渦巻くこの感情を振り払うため、そして、最後にアイツと決着を付けるため、ここまで使ってきた木刀を手にアイツの部屋へ向かった。アイツとの勝負の結果は、七百四十三勝七百四十三敗五百二十四引き分けて終わっていた。今日勝てば、俺の勝ちだ。

―アイツには、全体に負けない―

そんなことを考えてたら、あっという間にアイツの部屋へ来てしまった。

今日に限って、この取っ手を握るのが怖い。握ってしまったら、扉を開けてしまったら、二度と会えなくなるような気がしてしまった。アイツや、メイシェンが見たらきつと、

「エルザらしくないじゃん。大丈夫だから握ってごらんよ」

って言われる気がする。

幻の中の友人達が「早く!!」と急かす。
意志を決め、俺は扉を叩いた。

「はい」

「居るか？入るぞ」

扉を開けると、丁度満月が見える窓をバックに、金髪でブルーサファリアの瞳のライバル、カナト・デイルアが木刀を持って立っていた。

男に使うのは変かもしれないが、カナトはどこか神秘的で綺麗だった。ただし、アイツ、ちょっと童顔ぎみなんだよね…。

「やっぱり来ると思った」

カナトは、俺が来ることを予想していたらしい。やっぱり、全部お見通しだな、アイツには。

「分かってたのか？」

答えは明確のような気がするが、あえて聞いてみた。

カナトは結構トンチンカンな答えが返って来ることがあるからな…。

「うん、分かってた。学校寮での最後の夜だしね…。それに、エル

ザの気配がしたから、また勝負しに来たのかなって」

おいおいおいおい、こんな所で検索スキル使うなよ。

呆れてものが言えなくなつた俺は、でつかいため息をついた。

毎度ながら、こいつのやることなすことその全てに度肝を抜かれて
いる。試験の時は本当に腰が抜けちまつて、数分は立てなかったの
は、リノとの秘密だ。

これから俺が何をしたいのか分かっているのなら、もう、これ以上
言う必要は無かつた。

「中庭で待つてる。準備が終わり次第さつさと来い」

それだけを言い残し、俺はカナトの部屋を後にした。

夜空の色が濃くなる頃になって、やっと来た。

あああああ！！たく、おっせーんだよ！！そこ急ぐだろ、普通。
なのにアイツ、悠長に歩いて来てやがるし…。

しかも、

「あ、ごめん。待つた？」

なんてにこやかに言うし。

本当にコイツには驚かされるよ、本当…。いや、今回ばかりは驚き
を通り越して、呆れた。

いつものことだろ？と自分に言い聞かせ、黙って木刀を構える。

コイツには「さつさと構えろよ」なんてセリフは要らない。いつも
はアホだけど、こういう時の真剣さは、ずば抜けて凄い。

や、お世辞じゃねーから、ガチだから！！

俺が構えるのを見て、カナトも木刀を構えた。俺のと同じくらいすり減っているその木刀を。

そのまま、精神を研ぎ澄ませ一瞬の動きを待つ。

真つ暗闇の中、水の上に立っているような不安定な感覚。集中を途切らせてしまったら今にも沈んでしまうかもしれない恐さ。

それを感じながら、俺は下段にカナトは発送に構えている。

お互いがお互いの目を見て威圧を送っていると、

―不意に風が吹いた。

それが合図となり、二人で同時に踏み出した。

風をきる音が耳元でする。音が大きくなるにつれ、俺もカナトも加速する。

先に切りかかったのは―俺だ。

下段から斜め上に振り上げるが、カナトは俺の軌道を自分ので逸らしながら、バックステップで後ろにさがる、と俺が認識した次の瞬間、さがった時にかかった体重移動を利用して突きを繰り出して来る。

すれすれの所でさばき、木刀を横風に払う。カナトがバックステップでさがったところに下から振り上げる。

避けきれないと思ったのか、そのまま木刀で受け、鏑迫り合いへ。

油断も隙も無く、お互いバックステップでさがり、体勢を立て直す。

動いたのは俺の方が早かった。

いまだに静止状態のカナトに一閃いれる。寸止めするつもりが誤って振り切ってしまったが、打ち抜く感覚が無かった。

「まさかと思った。

そのまさかの事態に気づいた時には後ろに回られていた。

幻影。騎士団の幹部級のやつらでやつと使えるようになる代物技だ。それを明日卒業とわいえ学生がいとも簡単にやってしまうなんて……。つたく、やつぱコイツには驚かされるよ、本当。

すかさず反応して、カナトの木刀を受ける。

「……っちー!!」

あれ？今、カナトの舌打ちが聞こえたような……。

カナトをそのまま押し返すと、足を伸ばしたまま後方に一回転して着地。そこところも華麗に決めてくるのがアイツだ。って、見せ物かよっ！

俺は中段に構えて精神を統一した。

俺だっで見せられて終わりじゃねーよ！

カナトの攻撃をそのまま受け止め、喰らった分の力を上乗せして、一閃いれる。

カナトは目を見開いていた。

騎士団幹部級のやつらが使える代物を使う学生は、お前だけじゃねえ。

カウンター！

相手から喰らった攻撃分を上乗せして攻撃する素人には扱いづらい技だ。

カナトはそのままバックステップで、俺はバク転で後ろにさがった。

相手を見ると、カナトの口元が弧を描いていた。次の一撃で決めるらしい。

そっちがその気なら、こっちだって次で決めてやる。

要らない対抗心むき出しだった。

二人同時に踏み出して、俺は横風、アイツは上段から一撃を繰り出した。

卒業前夜（エルザ side）（後書き）

実はエルザ君もなんだかって天才です。

気づいたらアクセス総数が150いつてました。
読んで頂けるだけでも感謝×2です（ ）

フタリノナマエ（エルザ side）（前書き）

エルザ君視点続きます。

フタリノナマエ（エルザ side）

やっぱり、いつまでたっても雌雄はつかないらしい。

俺の首もとにも、カナトの首もとにもお互いの木刀がおかれていた。

「また、引き分けかよ」

「今回は僕が勝つと思ったのになあ…」

ため息をついてしよげるカナト。よっぽど自信あったのか？

使ったとはいえ、俺のカウンターもカナトの幻影もまだまだ甘いところがある。格好つけて繰り出したのが仇になっちまったりして…。結局、勝負が持ち越しのまま卒業しちまうのか。

不意に体の軸がずれたかと感じるとそのまま後ろに倒れ込んでしまった。

俺の隣でドサツと音がする。

音がした方を見るとカナトも同じように倒れ込んでいた。

「ふふっ、はは、ははははは」

「くすくす、くすっ、あはははは」

お互いの顔を見合わせて、その間抜け顔にお互い笑ってしまふ。

静寂な筈の学生寮に二つの笑い声がこだまする。あーあ、明日朝一番に怒られるんだろうな。卒業前にトイレ掃除だけは勘弁してほしいけど…。

やっと落ち着き、学生寮に静寂が戻った頃、真剣な顔になってカナトが口を開いた。

「エルザにだけは、話しておこうと思う」

「え？」

『話しておこうと思う』は、カナトが秘密の話をする時の口癖だ。このタイミングで持ちかけるということは、今まで誰にも言えなかったことを俺に話してくれるのではないかと思い、驚いた。

俺なんか いいのか？

そんな不安が過ぎった。

「僕の本当の名前のことなんだけど…」

「ああ…」

カナト・ディルアは本当の名前ではない！？どういうことが分からず、あいずちを打つことしかできなかった。

「僕の本当の名前は、カナト・フォル・クロディリア。この名前の意味、分かるよね？」

「クロディリア。」

知らない訳がない。この世界に住んでいる者なら知っている英雄の名前。

ツバサ・リナリア・クロディリア。

俺は、目を見開いて真剣なカナトの顔を見て、ため息をついて、空を仰いだ。毎度のことながら、コイツにはいつも驚かされる。だけどその反面、びっくりするような血筋を引いているやつが他にも、それも近くにいることに安堵していた俺がいた。

「ごめん、過去に色々あって、本当のことを隠してたんだ。リノやメイシェン、それにフィルにはいつか言うつもり。だから、それまで黙っていてくれる？」

「当たり前だろ！」

申し訳なさそうな顔をするカナトに、笑って答えてやる。それを見て、安心したようにそっと微笑む。

俺も本当のことを言おうと思った。

アイツが言ってくれなかったら、きっと俺は、親友に伝えられてなかったと思う。

「俺もお前に言わなくちゃいけないことがあるんだけど…」

「何？」

きっと、どんな俺でもお前は受け入れてくれると思う。

だって、俺は…。

「えっ…」

そう言っただけでカナトはブルーサファイアの瞳を丸くして俺を見た。コイツのぽかんとした顔には「嘘でしょっ!？」と書いてあるのがあからさまに見える。

その間抜け顔をみて、「ちょっとコイツに勝った」感を感じた。いつもやられてることをやってやると、達成感があつて、しかもコイツの混乱した顔が見れるのが最高に面白かった。

あ、あんまりいじるのは止めておこう。こう見えてコイツ、結構繊細だからな…。

「本当だつて。神父様にもちゃんと確認取った」

「え、じゃあ本当に…」

「だーからー、さつきから言ってるだろ！？俺の名前は、エルザ・ラグナス・ジェノス！！行方不明だったジェノスの第一皇子だつて！！」

と言つてはいるが、正直俺も最初聞いた時は驚いた。

俺が知ったのは、一年前の夏休み。

久しぶりに孤児院に戻ったら、偶然、いつもと違う風景に出会った。ジェノス軍の数名が、孤児院の周りに配置されていて、孤児院の関係者と言わないと入れないくらい嚴重だった。

神父様に挨拶しようと書斎に入ったら、神父様の隣に二、三歳年下の赤毛の少年がいた。

少年と神父様の話を聞いて、やっと俺の正体が判明した。

…と、要約したらこんな感じか？

ちなみに、その時来ていた少年は、エミリオっていう名前で第二皇子で、俺の弟。その後から今までの間、結構手紙でやりとりしてる。

「分かったつて。そういえば、エルザがジェノスに行く理由って実家に帰るため？リデリアにはもう、帰って来ないの？」

にこやかな顔をしたが、質問をしてきた時に悲しげな顔をした。

少し慌てた。帰って来ないわけはないし、向ここの貴族社会に少しなれてくるだけのつもりだ。

その後、全てが落ち着いたら、リデリアに戻って来て騎士団の仕事に就くつもりだし。

そのことを伝えると、顔を輝かせて起き上がった。

コイツの行動って、気難しい貴族の令嬢より分かりやすく単純だった。

え？なんで貴族の令嬢と比べるかって？やあ、だって、言いづらいけどコイツ、行動が女っぽいし…。

その証拠がコイツのノート。なんと言っても字が丸い！そして、計算されている説明図の位置！仕上げはクラスの女子顔負けの色ペンの使い分け！

男子として少し引いたな、あれは…。

まあ、カナトだからと、ほっとしていたところがあっただけだな…。

「そっか、良かった。ライバルが帰って来ないのは聞き捨てならないからね」

だーかーらー、そういう表情が女々しいんだっつーの！と言っのは止めて、心の中にしまっておいた。

神木の方から朝日が差し込む。とうとう夜更かししてしまったらしい。

「とうとう、来ちゃったか…」

そう言って、やっと俺は起き上がる。

隣でカナトが悲しみを含んだ笑顔を作っていた。

「…これで終わりじゃ、ないよ、ね？」

不安を隠して、俺も微笑む。

「阿呆、始まるんだよ！これから…」

卒業式まであと僅か。俺はそっと、此处へ帰って来ると神木に誓った。

………予期せぬ戦いのせいで、此处へ帰って来れないことを知らずに。

卒業というより試練では？

昨日の夜、夜更かししていたことは、教官方に怒られることは無かった。

僕達みたいな人は、毎年誰かしらいるんだって！まあ、だから言ってもいいわけないんだけどね…。

制服を着て、キツイけどネクタイを上までしっかり絞めて、卒業生がつけるコサージュを付ける。明るい色の色とりどりの花で作られたコサージュは、白をベースに青のラインが入ったジャッケトにはちよつと目立った。

荷物を部屋の入り口付近に置いて教室に向かった。

いつもより騒がしいのは卒業式だからだと思う。廊下を渡る途中で何人もの人に、いつも以上に話しかけられた。もちろん、違うクラスの人や後輩達に。

教室に入るとみんな誰かと話していた。僕もとあるグループの中に入る。

「おはよー！」

そう言って、手を振りながら近づいたグループはもちろん、いつものグループだ。

「よっ！おはようさん」

「おはようー！」

「おはようございます、カナト」

エルザ、メイシェン、リノの胸にも同じコサージュが付いている。
一時は思うと思っていた試験もなんとかパスできて今があると思ふ。

二人にバレないようにエルザがそつと耳打ちしてきた。

「昨日の夜のこと、怒られなかったか？」

昨日のことで教官が何も言わないので、少し不安がつているみたい。
メイシェンとリノには内緒だから、僕も耳打ちして返事をした。

「大丈夫。教官達には何も言われてないよ」

おつきなため息をついたエルザ。凄く安堵を感じているような気がする。

「そっちは、大丈夫だったんだな」

「そっちは？ってどういうこと！？」

エルザの言葉に首を傾げ、つい大声で言ってしまう。

「バカ！！声でけーよ！えっと、そのー、リノ達にバレた」

背中に悪寒が走り、恐る恐る二人の方を見る。リノは眉を寄せてちよつと可愛らしい。けど、問題はそっちじゃない。

メイシェンのその顔は、笑っていたけど…

怖い！怒ってる！！目が怒ってるよ！！！！

「カナトくん、昨日の夜、エルザ君と何してたのかなあ？なんで私たちも呼んでくれなかったのかなあ？」

怖い！エルザじゃないけど、ガチで怖い！！メイシエンの後ろに鬼がいるううう！！！！

結局、その気迫に対抗する術がなく、エルザと二人で土下座する羽目になった。

楽しい筈の朝は、メイシエンのお説教タイムに変わり、チャイムが鳴った時にやっと終わった。

二十分とはいえ、やっぱり足が痺れて上手く立てない…。モンスター性の麻痺ではないため、薬は使えない。改めて解除薬のありがたみが身に染みるほど分かった。

卒業式が終わり、正門付近が騒がしくなる。荷物を持った卒業生や、在校生、教官長を始めとした教官方などもいて、人で溢れかえっていた。

街でフィルと合流して、卒業パーティーをする為にさっさと門を出ようとした時だった。

「デイルアさん！！」

呼び止められて、声のする方を向いた。

そこに立っていたのは同じクラスの女子だった。

「どうしたの？」

そう言っただけで彼女に近づくと、その女子は顔を赤らめて目線を落とす

た。

「えっと、その……第二ボタンくださいー!!」

いきなりの申し込みに目を丸くした。

卒業式の日に女子が好きな男子に制服の第二ボタンをもらうという伝統が、この騎士学校にもあるわけですが……。

その伝統に則ってか、僕もやはり迫られました。

……好きだよね、そういうことするの。

「ごめん、制服は大事にとっておきたいから……」

敵等に答えると、彼女は少し悲しそうな顔をした。

「そう、ですか。ごめんなさい。それじゃあ、またどこかで。あなたに白翼の御加護がありますように」

「うん、またどこかで。あなたに黒翼の恩恵があらんことを……」

そう言って、手を振って別れた。

さっき言っていたのは、ちょっとした挨拶みたいなので、それぞれ二大英雄を表していて、白翼はリオの英雄、ツバサ・リナリア・クロ
デイリアを黒翼はネルの英雄、黒鉄
翼クロガネ ヨクのことを表しているんだ。

正門へ向かって歩き出した時、尋常じゃない声に本日二度目の悪寒が走った。

嫌な予感がしたから、恐る恐る振り返ってみたけど……

予感的中!! やっぱり無視しておけば良かった。

「カナト君! 第二ボタンちょうだい!!」

「デイルア先輩、私にください!!」

「第二ボタンちょうだい!!」

結構な人数の女子が団体ご一行様でこちらに迫って来ていた。

一人だけならまだしも、あんな人数に囲まれるのだけは勘弁してほしい。

囲まれる前に、急いで正門に全力疾走した。

卒業というより試練では？（後書き）

ご感想など頂けたらと思います。

打ち上げ

逃げるように走って、街にあるレストランに飛び込んだ。
先に来ていた他の人達が驚いたように、こちらを向いた。

「おい…大丈夫かよ？」

「エルザ、卒業式で何かあったのか？」

「さあ？あ、でもカナトのやつけっこうモテるから、また女子に追われてたんじゃね？」

いつものことのように話すエルザの話をあっけらかんという表情で聞いているフィルの横で、メイシエンは大声で笑っていた。

リノはというと、少しムツとした感じでこちらを見ていた。…なん
でリノがムツとするの？

「で、今日はどうして追っかけられたの？」

メイシエンの質問でやつと思いつ出した。

「ああ！！そうだよ、聞いてよ！！正門の所で女の子達に『第二ボ
タンちようだい！！』って追いかけられたんだよ！逃げるの大変だ
ったんだから！！」

僕の必死の訴えに、メイシエン、エルザは聞かぬフリをして知らん
顔してる。

「なあエルザ、カナトって、普段もあんな感じで追いかけてた
のか？」

フィルは苦笑いしながらエルザに聞いた。なんでそこを僕じゃなくて、エルザに聞くの！？

「追いかけてはならないけど、ファンレターとラブレターと決闘の申し込みは絶えず来てたな」

こちらもまた苦笑いで答えた。

そういえば、そうだったけ？なんて思い出に浸っていたら、リノが凄く取り乱したようにこちらに迫って来た。

「それ、本当ですか！？第二ボタンはどうしたのですか？」

座っていた椅子から勢いよく立ち上がって僕の方を見る。

「逃げて来たよ。それに、第二ボタンはちゃんとここにあるよ」

制服を指差してみせた。

リノはそれを見て、安心するようにため息をついてそつと微笑んだ。なんでリノが安心なんてするんだろう？

リノの微笑む顔を見たたん、ドクンと心臓がなる。それと同時に顔が少し熱くなる。あれ？僕、どうしちゃったんだろう？

エルザとメイシェンが、ニヤニヤしていた。

え！？何！？僕変な事した？

わけが分からず立っていると、

「カナト、いい加減座ったらどうだ？」

って、王子様に言われてしまった。しかも呆れ気味に。

そういえば僕、ずっと立ちっぱなしだったわけ？

フィルに言われて、やっと自分の席についた。

この店はけっこう質素で家庭的な感じのレストランだった。フィルが選んで予約したのだが、フィルが選ぶのはもつと、こう…豪華でちよつと高そうな雰囲気のお店だと思った。値段もリーズナブルだし…。

「このお店、何時見つけたの？」

「二年前に見つけたんだ。えつと、その時もあんな感じで脱走してたんだっけ？で、脱走中に腹が減ってリーズナブルな所を探して、たまたま入ったのがこの店で安い上にとてもウマかったんだ！それから、通いだしたわけ」

……………えつと、王子様、ですよ？なんでリーズナブルな店に入ったのですか？その前に、なんで脱走してたのですか？そして、一体何時からそんなことしていたのですか？

フィル以外のメンバーは呆れて苦笑いするしかなかった。

「………「かんぱーい！！」「……」」

ジュースの入ったグラスを高々と掲げ、乾杯する。

目の前の料理を楽しく食べながら、思い出話しや日常生活でのたわいない話など、色々した。

「そうだ！！」

何かを思い出したかと思ったら、綺麗に包装された手のひらサイズの四角い物を四つ取り出して来た。

「ユエから預かっていたんだ。これをカナト達につて…」

僕達はそれぞれ受け取ると、包装紙を開けていった。中に入っていたのは手鏡だった。

「その鏡は、ユエお手製のマジックアイテムで、この鏡を持っている者同士なら何時でもどんな場所でも連絡が取れるんだ。誰かからの通信が入れば、鏡が熱を帯びて知らせくれる仕組みになっているらしい」

フィルの説明に僕達四人は顔を見合わせると、嬉しさの余り、騒ぎだした。

こうしている間にも、出発の時間は刻一刻と迫って来る。

故郷での出会い（前書き）

久しぶりの投稿です。

あっ！！ストック切れた（。o ;

故郷での出会い

窓からの光で目が覚めた。瞼を開くとベッドの天井が目に入る。いつも使っている学生寮のベッドには、天井なんて物はない。そう、ここは王都リデリアから見て北にある街、オルラントのクロデイリア公爵邸の自室だ。

昨日エルザ達と別れた後、一日かかる距離をこっそり覚えた転移魔法で一瞬で帰って来たのです！本当、魔法って便利！！

いきなり帰って来た従兄弟に、現頭首であるアヤト従兄さん（にいさん）が腰が抜けて十分くらい立てなかったのは、ここだけの話し。白のシャツに黒のズボン、シャツの上に茶色のジャケットという貴族らしくない格好に着替え、自室を後にする。

「そんな急すぎないか！？」

「急でもないと思うけど……」

ダイニングルームで朝食をとっているときに、一週間後に出発するとアヤト従兄さんに伝えたら早すぎると怒られてしまった。

一つ年上の従兄弟は、こう見えて心配性＆寂しがり屋なのだ。

もう少し邸にいたい気持ちもあるけれど、あまり居すぎると今度はユグドラシルに行くことができなくなる。アヤト従兄さんにはわかって欲しかった。

「もう少し、邸にいることはできないのか？どうしても一週間後じゃなきゃ駄目なのか？」

「もう船のチケット取っちゃったから。それに、善は急げって言うじゃん」

アヤト従兄さんは溜め息をつくと少し微笑んだ。

「しょうがない従弟おとうとだな。分かった、行ってこい。あ、お土産買い忘れるなよ」

「ごめん。ありがとう、アヤト従兄さん」

笑って見せたつもりが申し訳なさそうな雰囲気が出ていたのかもしれない。席を立ったアヤト従兄さんは僕の所まで来ると、そつと頭を撫でてくれた。

アヤト従兄さんに頭を撫でてもらうのは何歳になっても嬉しい。え？十八歳になつて頭撫でられるのは恥ずかしくないのかつて？時と場合によるけれど、アヤト従兄さんはそういうの考えてやってるから問題ないって、僕自身は思ってる。

しばらく撫でられた後、アヤト従兄さんは執務室へ、僕は街に旅の必要物資を調達しに行った。

この街に帰って来るのは、父さん

の葬式以来だ。あの時は街の雰囲気も暗かったけど、それを除いたら僕が生まれてから変わった所はまるで無かった。

港がすぐ近くにあることもあって、相変わらず品物が豊富で、沢山の店があつて賑やかだった。

「カナト様！！帰っていらしてたんですね！」

「カナト様、今日は良い品が入ってますよー！！」

「カナトさまおかえりー！」

街の人達が次々に声をかけてきてくれる。

温かいその声の一つ一つ答えていってたら、危うく本来の目的を忘れて、最初に行こうと思つてた店を通り過ぎそうになった。

「いらつしゃいませ…、あら！カナトさま、お帰りになられていらつしゃっていたのですか？」

「うん、でも来週からまた出掛けるけどね。あ、そうだ！！新しく入荷した武器ってある？」

「あら、もう来週には出掛けてしまえますの？もう少しのんびりされてもよろしいと思いますのに…」

そう言いながら店員さんは奥の方へ行く。

その間に、店に飾られている武器を手にとって見る。

最初に見たのはロングソード。

いつも使っているロングソードと少し違い、少し固い。素材はアイアンを使っているようだ。

少し素振って見たら、卒業前まで使っていたのよりも使いやすかったが、少し重かった。

次に見たのは、レイピアだった。

元々、レイピアは速さ重視の武器だし、ロングソードと違って「突き」に特化した武器だから、相性が悪かった。

溜め息について隣に目をやったときに、ふと見知らぬ剣が目に入った。

…いや、剣と言って良いのか分らない。

それは片方にしか刃がなくて、剣先にかけて反れている不思議な武器だった。

それに魅入られていると、奥からいくつかのソード系の武器を持って来た店員さんが戻って来た。

「カナト様は、【刀】に興味をお持ちなのですか？」

「…カタナ？」

僕が見入っていた武器は、【刀】って言うらしい。扱い方は剣とさほど変わりなさそう。

僕は刀を手にとると軽く素振って見た。

うん、重さもあまり変わりはないみたい。

「これにしようかな？」

呟いたのが聞こえたのか、店員さんは急いで奥へ行って、暫くして何か棒のような物（布に包まれているからそれ以外なんとも言えない）を持って来た。

「カナト様ならきつとこれが扱えると思います」

笑顔でそう言いながら、布を取った。

布の中には、一振りの刀があった。漆黒の刀身に金色の蝶と雲の模様が入った和風の鞘。それはどこか神秘的だった。

「これは、【魔刀夜叉】という魔刀です。三百年前にネルの職人、

橘 神威（タチバナ

カムイ）が鍛えた武器だそうです。なんでも、【世界の狭間】から落ちて来たとか…」

橘 神威…、聞いたことがある。三百年前のネルの日本という国の凄腕の武器職人だったらしい。

更に店員さんは話を続ける。

「夜叉は自らの持ち主を選ぶと言われていて、まだ誰も扱えた試しがないんです。でも、カナト様ならきつと…」

そういつて差し出された刀、夜叉を手にした瞬間だった。

『汝、力求む者か？』

どこからか低い男の人の声がした。多分、夜叉の声だと思う。

『汝、力求む者か？』

僕は彼の声に答えた。

「我が名はカナト？ フォル？ クロディア、守りの力を求む者なり」
使った事がない言葉使いがすらすら出てくる。

…我ながら仰天してます。

『汝、何故守りの力を求む』

その質問にはつきりと答える。ありったけの想いを込めて。

「僕は、助けられるばかりで誰も助けたことがない。あつたとしても数えられるくらいだ。そんなのはイヤだ！ 強く…強くなって、大切な人達をこの手で守りたいんだ！！」

そつ、五歳の時にユエ教官に助けられ、父さん、母さん、アヤト従兄さんに学校みんな…。

彼等に助けられ、支えられ、今僕はここにいるんだ。

『この三百年間、汝のような変わり者など見たことがない。……面

白い。良からう、カナト？ フォル？ クロディア 汝を主とし、我が力を与える』

そのとたん、足元に蒼い魔法陣が浮かぶ。

不思議な顔でこちらを見ていた店員さんは慌てて魔法陣から離れた。

『これは契約。 汝、我を受け入れるか？』

もちろん、答えは…

「その契約、交わそう！！ 命散りゆくその時まで、 汝と共に在らんことを！！」

そう言つと、僕を蒼白い光が包んだ。

「……………んっ……………」

眩しすぎて目を開けられない。 思わず目を瞑った。

夜叉を握った右腕から、魔力と似て異なる力が激流のごとく流れてくる。

…イタイ…………… ツライ…………… キツイ…………… タスケテ……………

……………。

夜叉の力と一緒に流れてくる感情を

のみこむ。 こうでもしないと狂って暴れだしてしまいそうで怖かった。

時間がたつにつれ流れてくる力の量も徐々に減っていき、 負の感情も収まっていく。

流れるモノを感じなくなった頃、 ようやく目を開けることができる

ようになった。

………恐る恐るだけだね。

僕が持っていた右腕にある魔刀は何も変わっていなかった。
変わっていたのは僕の右手の甲だ。

満月のような物に鞘と同じ雲がかかっている、その近くを蝶（多分、オオムラサキ）が飛んでいるという刺青がいつの間にか刻まれていた。

………え、刺青？ナンカチョットヤバイ………？

『契約は完了した。よくぞ耐えたな、主よ』

夜叉の言葉で我にかえる。

そうか、これが契約だったんだ。これじゃあ、誰も耐えられる人いないよね……。

契約をしようとした皆様に心の何処かで同情してしまいました。

「ねえ夜叉、この手の甲の刺青って……」

『そうだ。主が考えていることは正しい。その刺青は契約印、我と主が契約した証だ』

えっと、なんて言うんだっけ？えっと……あ、あれだ！ベタってヤツだ！！

うん、予想外なのか範囲内なのかよく分からないけどなんとなく冷や汗流れたような気がする。立っちゃいけないものが立っちゃったような気がする。

えっと、フラグってやつ？

とりあえず店員さんに鞘と包帯貰って、夜叉を鞘に戻して腰にさした後、包帯で刺青を隠した。

この店を出て片手だけの指だしグローブを買ったのは言うまでもな

いと思う。

「ああ、そうだ。夜叉の代金……」

「譲ってもらった物ですし、カナト様以外扱える方はいらっしやらないと思うので、お代は要りませんわ」

そう店員さんは言うが、なんだか申し訳なかった。

「え……でも……」

「それじゃあ……卒業祝いなら、納得していただけますか？」

結局、卒業祝いという名目で夜叉を譲り受けてしまった。

買い物も一通り終わり、邸に帰ろうとした時だった。

「天狼が人を襲った！街の方に向かって来てるぞー！！」

街の誰かが叫んだのを聞いて、持っていた荷物を近くの店の店員さんに押しつけるように預けると、天狼がいる森の方へ走って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8117x/>

WING

2011年11月4日17時06分発行